

がんセンターたより

【市民公開講座－AYA世代(若年者)のがんを学ぼう－】

第11回市民公開講座「がんを知る」を令和2年1月18日(土)に新都市ホール(横浜そごう9階)で開催しました。国の第3期がん対策推進基本計画(平成29年度閣議決定)に初めてAYA世代のがん対策が明記されたことを受けて、今回は『AYA世代(若年者)のがんを学ぼう』というテーマで、若い方がかかりやすいがんを焦点を当てました。当日は小雪が舞う悪天候にもかかわらず、165名の参加がありました。

AYA世代とがん

副院長 金森 平和

AYA世代とはAdolescents(思春期)からYoung Adults(若年成人)までの総称で、一般に15歳から40歳未満までを指します。この年代のがん患者は年間2万人程度で、特に25歳未満では約2,000人と報告されています。10～20代では希少がんである血液がん、脳腫瘍、骨腫瘍・軟部肉腫、性腺腫瘍などがみられ、30代では乳がんや婦人科がんの比率が高くなります。AYA世代は身体的・精神的に成長・発達し、自立していく重要な時期であり、がんとの闘病中・後に就学・就労・結婚・出産など、人生において重要な出来事と向き合う時でもあります。心理的・社会的問題とともに自立の程度や置かれた状況も様々であるため、医療機関のみならず社会全体で支援することが重要になります。今回の公開講座では、病気の話にとどまらず、どのように患者・家族の支援を行うかという観点からも話をいただきました。

急性白血病

血液内科 田中 正嗣

急性白血病は血液のがんです。AYA世代での発症頻度は3.5人/10万人/年です。急性骨髄性白血病と急性リンパ性白血病の2つに分類されます。治療は化学療法や造血幹細胞移植が行われます。急性リンパ性白血病では小児型治療を行うことにより、治療成績が飛躍的に向上しています。このため、治癒した後の生活の質の向上が求められており、その一つとして妊孕性温存があります。急性白血病は診断してから治療開始までの期間が1～3日程度と短く、男性ではその間に精子保存が可能ですが、女性では治療して病状が安定した後に卵子保存や卵巣保存を行うしかないのが現状であり、今後の重要な課題です。

当科における妊孕性温存治療の成否の割合

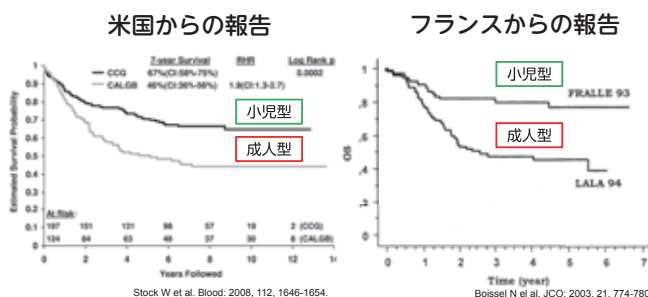
*2014年1月から2018年3月までに神奈川県立がんセンター 血液内科を初回受診した患者さん。
*化学療法または同種造血幹細胞移植を施行した40歳未満の患者さん。

		男性 精子保存	女性 卵巣保存
化学療法施行前	保存できた	8	0
	保存できなかった	0	0
化学療法施行後	保存できた	1	2
	保存できなかった	2	0
希望なし / 主治医が無理と判断		4 / 8	2 / 8

→女性患者の妊孕性温存施行率を高めることが課題

AYA世代の急性リンパ性白血病は小児型治療がよい。

治療成績は向上してきている → 生活の質の向上が次の課題



悪性リンパ腫

腫瘍内科 本橋 賢治

悪性リンパ腫の総論と代表的な疾患（びまん性大細胞型B細胞リンパ腫（DLBCL）、ホジキンリンパ腫）についてお話をしました。DLBCLは全年齢層で最も多いタイプのリンパ腫で、若年者でも多く認めます。MYC異常やCD5陽性ものは中枢神経再発のリスクが高く、通常より治療強度を強めたり、中枢神経再発予防を加えたりと治療の工夫を行っています。ホジキンリンパ腫はリンパ腫の中では予後良好とされていますが、再発難治の場合もあります。再発難治の場合は、抗体薬と抗癌剤を組み合わせた薬（ブレンツキシマブベドチン）や免疫チェックポイント阻害薬、必要に応じて造血幹細胞移植まで行い、治癒を目指した治療を行っています。

精巣腫瘍

泌尿器科医長 鈴木 孝尚



泌尿器科領域で「精巣腫瘍」の講演を担当させていただきました。

精巣がんは10万人に1～2人と比較的稀ながんですが、AYA世代、特に20代男性では白血病に次いで多いがんであるといわれています。生殖器の病気であり、受診をためらってしまう方もいるかもしれませんが、早期に診断・治療をできれば完治が期待できるがんがあります。異常に気づいたら、恥ずかしがらずにすぐに泌尿器科を受診し、適切な治療を受けていただきたいと思います。

末筆ながら、このような貴重な講演の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。また、今回の講演が市民の皆様のお役に立てたのであれば幸いです。

骨軟部腫瘍

骨軟部腫瘍外科部長 比留間 徹

一般的に15歳から39歳の患者さんは、小児がんや介護保険など公的な医療支援の恩恵を受けにくい谷間の年齢層で、AYA世代と呼ばれている。骨軟部腫瘍の患者さんは前期AYA世代とも言うべき15～25歳で初診する方が多い。修学、スポーツ活動、就職、結婚準備など背景はさまざまであり、日常生活復帰を目指した医療についてお話しさせていただいた。また治療経過において運動機能の回復もケースバイケースである。患者さんのニーズにいかに対応されるかということはおもにより、親御さんはじめ家族の支えが重要であることにもふれたが、一般の方々の参考になれば幸いである。



婦人科がん

婦人科 北川 雅一

婦人科がんは、主に子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌の三つがあり、いずれもAYA世代で認められるが、2015年の全国統計では40歳未満の子宮頸癌が2068人と、AYA世代の中で最多である（全年齢での19.2%。上皮内癌を除く）。どのがんも標準治療が定まっているが、子宮全摘や放射線治療を要するなど、妊孕性を失わせてしまう治療が多い。一部の早期がんでは、妊孕性温存治療が許容される場合がある。



子宮頸癌は早期発見のための定期的な癌検診とHPVワクチン接種が非常に重要である。また、卵巣癌は低用量ピルの内服で発症リスクを下げることができ、また遺伝性乳癌卵巣癌症候群ではリスク低減卵巣卵管切除が有効である。

がん相談支援センターにおけるAYA世代への支援

がん相談支援センター 勝呂 加奈子

AYA世代のがん患者さんは、進学・就職・恋愛・結婚・出産・育児などさまざまなライフイベントを経験されます。がん罹患により将来のプランの変更を余儀なくされることもあり、年代ごとの悩みの違いもあります。

がん相談支援センターは、患者さん・ご家族・一般市民のどなたでも無料で利用できる相談窓口であり、AYA世代の方への支援も行っていることをご紹介しました。信頼できる情報源の紹介、経済的な相談、就労支援、妊孕性への支援、子どもに病気を伝えることに関して、アピランス（外見上の変化への）ケアなど様々なご相談に対応しておりますので、公開講座を通じて必要な方にご活用いただけることを願っております。

AYA世代の小児がん患者・経験者の体験を理解すること

神奈川県立こども医療センター小児がん相談支援室
小児看護専門看護師 竹之内 直子



身体的・精神的・心理社会的に大きな変化を遂げるAYA世代の時期に、がん罹患すること、また小児がん経験者としてこの時期を生きることは、様々な影響がある。思春期にがんを発症した子どもたちは病気や治療、また入院体験についてショックや不安を感じ、「どうしていいのかわからない」不確かさや、「でもやるしかない」思いなど様々な気持ちに揺れながら自分の病気や治療に向き合っている。また、AYA世代にある小児がん経験者の中には、晩期合併症により病気を意識せざるを得ない感覚をもちたり、治療を乗り越え生きる意味を自分自身に問うている者もいる。彼らの体験を理解し、彼らが自分らしく生活できるように、見守り、ニーズに合わせた支援が求められる。

【国外出張報告】

EMUC19 帰朝報告

泌尿器科 野口 剛



2019年11月14日から17日までオーストリアのウィーンで開催された第11回欧州泌尿器癌学会(EMUC19)に参加・演題発表させていただきました。

本学会では泌尿器癌の最新の研究成果が発表されており大変勉強になりました。BCG抵抗性高リスク表在性膀胱癌について本邦では膀胱全摘しか治療の選択肢がない中、海外では分子標的薬治療、免疫治療、温熱治療といった様々なtrialが行われていることに驚きました。また腎癌の薬物治療は年々updateされており、1st lineの治療選択に迷うことも多いのですが、これは世界共通の課題であり、エキスパートの先生方も試行錯誤しながら患者選択をしていることを改めて実感しました。徐々に分かり始めていること、そしてまだ分かっていないことを頭の中で整理できたのは今後の臨床や研究に活かせることかと思いました。

後学のためにと行ってみたウィーン国立オペラ座でのオペラ鑑賞は30分で寝てしまい1時間程度で逃げように出てきたのは良い思い出となりました。

このような貴重な機会を頂きましたことに深く感謝致します。

MOU (覚書) 締結に係る調印式について

重粒子線治療センター長 鎌田 正

1994年にQST病院(旧放射線医学総合研究所)にて世界で初めて開始された重粒子線治療は、2020年1月時点で世界13施設となり、優れた治療法として普及が進んでいます。

がんセンターの重粒子線治療装置i-ROCK(アイロック)は2015年12月に治療を開始しましたが、一部の疾患で保険が適応となったこともあり治療患者数も順調に増加し年間500名近くが当センターで治療を受けています。

2022年に韓国延世大学病院がんセンターにおいて同国初となる重粒子線治療施設稼働が決定し、先方より先進的な重粒子線治療ノウハウを持つ当センターとの人事交流及び患者紹介を行いたいとの打診があり、2019年12月2日にMOU締結に係る調印式を実施しました。

グム ギ チャン延世大学病院がんセンター病院長と中山治彦総長との間で和やかな雰囲気の中で署名が交わされ、その場で今後の患者紹介、定期的なシンポジウム開催等協力関係を深めていくことが約束されました。すでに患者紹介に向けて当センターの重粒子線治療プロトコールの提供や韓国側医師の短期研修が予定される等、具体的な協力が開始されています。



【ロボット手術運用開始】

直腸がん

消化器外科(大腸)部長 塩澤 学

2018年にロボット手術が直腸がんで保険適応になりました。2002年以降大腸がんに対する腹腔鏡手術が保険適応になりお腹のキズが小さく、術後の疼痛軽減、創感染の減少、入院期間の短縮に寄与してきました。そして現在は全国の大学病院、がん専門病院や一般総合病院を中心に直腸がんに対するロボット手術の急速な導入がされてきています。ロボット手術は腹腔鏡手術をさらに進化させた治療といってよいと思います。キズは腹腔鏡手術同様に小さく術後の疼痛は変わりませんが、ロボット手術の利点は何といっても術後の機能温存です。腹腔鏡に比べ立体的な視野下での手術が可能、拡大視されたモニターを見ながら手術遂行が可能で体の神経の1本1本がすべて見えるので神経温存の質が腹腔鏡よりも優れます。直腸がんの術後は排尿障害、性機能障害、排便機能障害が出やすいですがロボット手術で神経をしっかり温存することでこれらの合併症を回避できます。当院は2019年8月より直腸がんに対してロボット手術を導入しました。当然ながら患者さんの満足度も非常に高いです。



写真は神奈川がんのロボット支援下直腸がん手術風景。術者は患者さんと離れたところでアームを操作します。ほとんど出血しません。

胃がん

消化器外科(胃食道)部長 大島 貴



近年、胃がんに対する治療は、様々な新薬が承認されるなどドラスティックに変化しつつあります。しかし、ごく早期の癌を除いて、根治(=完治)を目指すには手術が欠かせません。現在、がんセンターでは腹腔鏡手術を積極的に導入し、患者さんに優しい低侵襲な治療を心がけています。しかし、腹腔鏡手術には、「道具をポート(小さな穴)から通して使うために動きに制限ができる」、「術野が平面的に見えてしまう」、「手振れが大きくなってしまう」などの弱点があります。これらの弱点を克服する為に期待されているのが、ロボット支援下胃切除(ダビンチ)であり、当センターでも今年度より導入いたしました。ロボットアームの先端が自在に動くため、切除する胃の周辺臓器に負担をかけずに手術が行えます。また立体視や手振れ補正機能があるため、より精緻な手術が行えます。当科では、ロボット支援下胃切除を積極的に行い、技術向上へのたゆまぬ努力を続け、患者さんと共に胃がん治療の「ミライ」を切り拓いてまいりたいと考えています。

【院内表彰について】

総務企画課長 山口 陽弘

永年勤続表彰

去る12月5日、令和元年度の永年勤続表彰授賞式が行われました。これは、機構本部で授賞式が行われてきたこれまでの優良職員表彰を、名称変更とともに会場を各病院へ移して行うこととなったもので、がんセンターからはこの度次の8名の方々が受賞されました。関山晶子、石渡靖、坪井香、芹澤のぞみ、関宣明、植村敏子、石原雅美、浅山真規子(敬称略)。

授賞式では、吉川理事長から表彰状が手渡され、また貴重なお言葉もいただきました。受賞された皆様、長年の間お疲れ様でした。そしてこの度は大変おめでとございました！

総長表彰

12月10日には、総長表彰の選考会を行いました。医療サービスを向上させる取り組みや病院経営の改善等に関する取り組みが10チームから発表されました。

結果は、優勝が「前立腺センターチーム」で、内容は「前立腺センター設立による包括的前立腺がん診療の推進」。その他、準優勝のチームは3つで、「呼吸器外科チーム」、「電話対応ワーキンググループ」、「会計業務改善チーム」がそれぞれ受賞しました。どのチームも当センターの運営の改善に向けて創意工夫がされており、多くの職員の記憶に残った様子でした。



お知らせ

当センターでは、毎週木曜日、2階ラウンジにて病院ボランティア会「ランパス」の方などによるミニコンサートを開催していますが、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、3月・4月は中止といたします。

開催する予定となりましたら、随時ホームページにてお知らせいたします。



編集後記

早いもので今年度も終盤を迎えています。何とか無事に終わりたいと思っていたら、新型コロナウイルスで大変な状況です。今回は1月に行ったAYA世代のがんをテーマとした市民公開講座を中心に、出張報告の他はロボット手術の現況などを載せました。どんな時もがんの患者さんはいらっしゃるので、私達は心を落ち着かせて診療に努めたいと考えています。このたよりが出る頃はコロナも終息の兆しが見えていることを祈ります。

(病院長 大川 伸一)

編集・発行： 神奈川県立がんセンター 総務企画課
〒241-8515 横浜市旭区中尾2-3-2
TEL 045-520-2222 (代表)
H P <http://kcch.kanagawa-pho.jp/>

